

芸術文化ワークショップ体験講座について

1 目的

ワークショップ体験を通して芸術文化の考え方を知り、課題を解決するためのアプローチ方法を実践的に学ぶことで、芸術文化が自分たちの生活に身近なもの知ってもらうことを目的とする。また、講座を通して、芸術文化を自分事として捉え、自分たちの生活や活動に活かすことで、芸術文化の価値をより多くの市民等知ってもらう一助とする。

2 概要

(1) 開催日時
第1回 令和7年12月13日(土) 13~17時
第2回 令和7年12月14日(日) 13~17時
第3回 令和7年12月20日(土) 13~17時
(2) 講師
古賀 今日子氏(俳優)
(3) 参加者
14名

※本事業には、昨年度の同事業に参加した者で、「フォローアップの取組」に参加を希望した7名のうち、2名がアシスタントとして参加。

3 内容(各回の詳細については、各報告書を参照)

昨年度は、「表現活動を行っている人」と限定したが、今年度は対象者を広げて実施した。ただし、昨年同様、ワークショップを作成、実施する上でのポイントを伝えながら、芸術文化の考え方を伝える内容となっている。

第1回 オリエンテーション・演劇ワークショップ体験
<ul style="list-style-type: none"> ・講座の目的、大野城市の取組の主旨、目的(コミュニティ文化課より) ・演劇ワークショップ体験 ・ワークショップを作成するためのポイント説明 →令和6年度同事業にて、講師、九州大学、大野城市で整理したもの ・個人・グループワーク(メインプログラム) →参加者の日々の生活や活動の中で「困っていること」「引っかかっていること」などの「わたくしごと」を書き出し、全体で共有する。この「わたくしごと」が次回ワークショップを作成する素となる。
第2回 ワークショップ作成
<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ体験 →昨年度の同事業にて作成したワークショッププログラムを体験。アシスタントとして参加している昨年度の受講生が進行を務める。 ・ワークショップ作成

→前回、書き出した「わたくしごと」とあらかじめ講師が用意していた「一般的に知られている遊び(例:カルタ、かくれんぼなど)」を掛け合わせて、ワークショッププログラム(ゲーム)を作成する。(強制発想法のイメージ)なお、作成する際は、それぞれのカードを持った参加者が、お互いのカードを見せ合い、プログラムの内容を検討する。

第3回 ワークショップ作成、ワークショップで遊ぶ
<ul style="list-style-type: none"> ・前回作成したワークショッププログラム候補を素に、プログラムとして完成できそうなものを4案抜粋する。その4案について、4グループに分かれて具体的なルール等を検討。 ・昨年度の参加者を招待し(7名参加)、作成したワークショッププログラムの実践。 ・講座の最後に、全体での振り返りを行った。振り返りでは、それぞれの活動に活かしてみたいというコメントや、考え方に変化があったことなどについてコメントが上がっていた。

4 アンケート結果(一部抜粋)

①参加の動機。

<表現活動に活かすことを目的としたこと>

- ・表現方法としてのワークショップの力をつけてみたいと思った。みんなが安全に演じられる空間を作り上げるファシリテーションを自分もできるようになりたい。
- ・自身がパフォーマー活動を行っているので、表現を幅を広げたり、自身の経験を人にシェアする方法を学びたいと思った。

<地域等での活動に活かすことを目的としたこと>

- ・別のワークショップに参加して楽しかったから。視覚障がい者のボランティアや不登校児と保護者のサポーター、地域サポーター、認知症のサポーターなどをしているので今後にも活かしていきたいと思い参加した。

<講座の内容等から参加したこと>

- ・私の表現をワークショップにするという題が私のアンテナに引っかかった。
- ・大学の非常勤講師である古賀先生がワークショップを開き、またお会いしたいと思った。

②講座での学びが生活や活動に活かせると感じた理由

<今後の活動に活かせると考えたもの>

- ・身近なものからストーリーを感じ取ったり、それを周囲の人とシェアする過程が今後の自身のパフォーマンスの魅せ方に活かせると感じた。
- ・普段大学生兼役者であるため、参加者の動きや話し方、仕草など演技に活かせる動作が多かったこと、ワークショップの内容で感情の扉が増えた。
- ・不登校児や保護者の方の集まり、地域交流会などの時に誰とも初対面でも遊びながら表現したり、一緒にプログラミングしていけると感じたので今後の活動に活かしていきたいと思った。

5 結果（講師との振り返りについては、別途実施）

- ・アンケートや講座の振り返りの中でも、交流やコミュニケーションについて答える声が多く、このワークショップは、受講する過程を通して、芸術文化が生活と地続きであることを知ってもらうことができるプログラムだと感じた。
- ・本プログラムでは、「自分の活動や生活の困りごとを書き出し、共有し、その中からワークを作る」というものであるが、どの箇所にも参加者同士の対話が必ず行われており、「自分のことを話す」「相手のことを聞く、受け入れる」ことがワークショップのステップの中で自然と行われていた。
- ・ワークショップを作る過程を知り、体験することで、コミュニケーションを取る際に気を付けることなどを考えることができる。また、自分を表現することの楽しさや相手の表現を受け入れる楽しさや気づきが産まれることが考えられる。
- ・一方で、活動に活かしたいとの回答があるように、芸術文化の考え方をそれぞれのフィールドで活用される余地はあるが、参加者自身に「担い手」という意識づけは難しいと感じている。

6 課題及び次年度以降の方針

- ・プランの目的である「芸術文化を身近なものだと思ってもらう」という目的を達成するためには、例えば、コンサート事業の敷居を下げるなど、様々なアプローチ方法があると思うが、今回のワークショップについては、「芸術文化ワークショップ」の考え方を知り、日々の活動や生活との関わりや、芸術文化の異なる一面を感じてもらうことで、目的を達成する一助となると考えられる。
- ・芸術文化の考え方が様々な分野に広まっていくことを期待する中で、参加者自身が「芸術文化が生活と地続きであること」を知ってもらうことが、本事業の重要な点のひとつであり、「芸術文化」が敷居の高くない、身近な形で、それぞれの活動に広まっていくことを期待したい。
- ・その中で、アーティストに限らず、本ワークショップを通して感じたことやプロセスを通して、「誰かと表現で何かやってみたい」にチャレンジすることが、別軸で実施しているフォローアップの取組の考え方や、芸術文化を支える担い手の育成の検討につながると考える。
- ・5で提示したように、ワークショッププログラムを作成することにフォーカスが当たった広報記事となっていたが、プログラムを作成することだけが、本講座の主目的ではない。プログラムを作成するということが講座への参加を「難しい」ものと思わせてしまったこと、講座との距離を遠ざけてしまった可能性がある。次年度以降の講座の内容や広報文言等について、検討したい。

6 講座の様子

○日頃の生活や活動の中でも困っていることや引っかかっていることを書き出す



○昨年度の同事業で誕生したワークショップを昨年度の参加者が進行して実施



○前日に書きだした困っていることや引っかかっている「わたくしごと」と「みんなが知っている遊び（鬼ごっこなど）」を組み合わせるワークづくり



○完成したワークショップを昨年度の参加者と共に実践

